



ナガサキ ピース・タイムズ

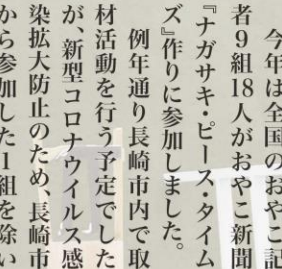
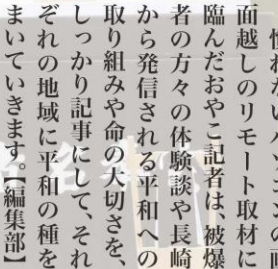
発行者【THE PUBLISHER】
日本非核宣言自治体協議会
(にほんひかくせんげんじちたいぎょうぎかい)
〒852-8117 長崎市平野町7番8号
長崎市 平和推進課内
電話:095-844-9923 FAX:095-846-5170
E-mail: info@nucfreejapan.com
ホームページ: http://www.nucfreejapan.com

NAGASAKI PEACE TIMES

【非核協】おやこ記者新聞

被爆75周年 新しい 平和発信の カタチ ～長崎で学ぶ「平和」と 「命」の大切さ～

原爆犠牲者之霊



今年是全国のおやこ記者9組18人がおやこ新聞『ナガサキ・ピース・タイムズ』作りに参加しました。例年通り長崎市内で取材活動を行う予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、長崎市から参加した1組を除いて、在宅のリモート取材を行うことになりました。慣れないパソコンの画面越しのリポート取材に臨んだおやこ記者は、被爆者の方々の体験談や長崎から発信される平和への取り組みや命の大切さを、しっかりと記事にして、それぞれの地域に平和の種をまいていきます。【編集部】

2020年(令和2年)8月9日、平和公園で被爆75周年「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が行われました。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、例年の約10分の1にあたる



ボランティアもマスクや手袋で感染防止対策



長崎原爆資料館ホール会場は三密対策を施しての式典中継でした

約500人が参列しました。原子爆弾がさく裂した11時2分に黙とうし、犠牲になられた方々へ追悼の意を捧げ、平和への誓いを新たにしました。



原爆がさく裂した11時2分に黙とう

75周年の節目
平和の思いを
世界へ届けよう



ぼくは被爆者の羽田麗子さんにオンラインで話を聞きました。原爆が落ちた時、金色、黄色、カーキ色が混ざったようなすごい光だったそうです。

ぼくは羽田さんから、争いのない世界をつくるために三つの大切なことを教えてもらいました。一つ目は、命をそまづにしないことです。自分や友達の命も大切



争いのない世界をつくるために

—羽田さんとの約束—



「津野陽紀恵子記者」

羽田さんに言われた「笑顔も大切にしていきたいと思います」。

世の中をつくりたいと思いました。

これは相手の気持ちをくみとらなくてはなりません。

この三つを守って、平和な世の中をつくりたいと思います。

にしないとけません。二つ目は、差別をしないことです。いじめも差別と同じです。三つめは、何か問題が起これば、話し合いで解決するということです。これは相手の気持ちをくみとらなくてはなりません。



1945（昭和20）年8月9日11時2分。

一発の原子爆弾が長崎市上空でさく裂し、

多くの犠牲者が出ました。

被爆から75年の今年、9人の被爆者の方々に

被爆当時の体験や記憶、

平和への思いをお聞きました。

リモート取材で伝える被爆者の思い

被爆者の八木道子さんに話を伺いました。18歳で被爆し、左腕と左足に重傷を負いました。防空壕の中の人の大火傷を負い全身の皮膚がたれた姿は、自身の傷の痛みを感じなくなる程、凄惨な情景だったと、話してくださいました。

終戦後、学校の先生になり原爆を知らない生徒が増えてきたことから、核兵器の本当の怖さを知っても

被爆者の八木道子さんに話を伺いました。

八木さんは小学校1年生の時に爆心地から3キロメートル離れた自宅二階で



被爆者の八木道子さんに話を伺いました。

八木さんは小学校1年生の時に爆心地から3キロメートル離れた自宅二階で

被爆者の八木道子さんに話を伺いました。

八木さんは小学校1年生の時に爆心地から3キロメートル離れた自宅二階で

被爆者の八木道子さんに話を伺いました。

体に残された原爆の記録 忘れたくても忘れられない

—被爆者・橋本 富太郎さん—



当時の長崎では多くの人が亡くなりましたが、その中には丸焦げで引き取り手もなく、お葬式もあげてもらえなかった人もいたと聞きました。

未来につなぐ平和のバトン 私が戦争を伝えていく

—被爆者・八木 道子さん—



飛行機を見ていて被爆しました。外に出ると、騒がしい蟬の声が全く聞こえず、静まりかえっていたそうです。

原子爆弾の爆風は、爆心地では秒速400メートルを超え、熱線は3千〜4千度もあり一瞬のうちに多くの人が



被爆者の気持ちを 受け継ぎ伝える 私達がすべきこと

—被爆者・築城 昭平さん—



らうため語り部活動を始めた築城さん。世界中に自分の胸中を知ってもらうため、英語を勉強し、自

分の言葉で他国でも活動をしてもらいました。75年経った今も、あの日感じた気持ちを消さないようにしたいとの強い思い。その気持ちを、しっかりと受け止め、私達は、多くの人にこの取材で知ったことを伝えていきます。

「小嶋美緒・陽子記者」

橋本さんが今でも原爆の後遺症と戦って苦労している話を聞いて、ぼくは二度とこのような戦争をしてはいけないと強く思いました。

「古川蒼士・麻子記者」





被爆体験を語り続けていく思い 戦争は絶対にだめだ

——被爆者・深堀 譲治さん——

被爆者である、深堀譲治さんに話を聞きました。原爆が投下された昭和20年8月9日、深堀さんはまだ中学校3年生でした。20センチメートル程の深さの灰に埋もれた自宅跡地から、亡くなった母親を見つけた時には、一粒の涙も出なかったと、当時の様子や気持ちを話してくれました。

「宗万知世 皇代記者」



私は、被爆者である末永浩さんに話を聞きました。末永さんは当時9歳で、お兄さんと約30キロメートル離れたところに疎開していましたが、後日家族で長崎に戻り、入市被爆しました。

一番の願いは戦争をしないこと 私たちの世代にできること

——被爆者・末永 浩さん——



「原心花 幸子記者」

また、平和のために戦争を知らない私達にできることは、「人と仲良くし、困っている人を助け、ケンカしてもすぐ仲直りすること」と教えてくれました。みんなの力で平和な世界をつくっていききたいと思いました。



75年前の被爆の記憶を後世に



積極的平和な社会へ 語り継いでいく

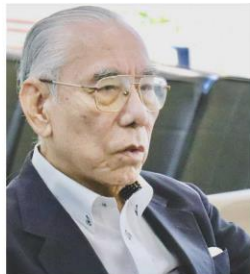
——被爆者・池田 道明さん——

被爆者の池田道明さんに話を聞きました。池田さんは6歳の時、母の職場の大病院で被爆しました。原爆の光で気を失い、気づいた時には廊下の板の下敷

12歳の時に長崎で被爆した田川博康さんは両親を原爆で亡くしました。父は傷ついた足を手術道具がなくノコギリで切られ帰宅して2日後に、母は無傷なのに放射能障害で亡くなりました。遺体を庭に埋めて高校2年生の時に掘り返してお墓に入れました。両親が死んだのにその毛布を取りに来る人がいる不人情な世の中でした。

思い出したくない、でも語らなければ 聞いてほしい被爆者の声

——被爆者・田川 博康さん——



かきの中にうもれているので欲望をおさえ、自分たちの根っこに戦争の根っこがあることに気付いてほしい、平和は簡単につけれないので、一人ひとりが平和を中心に未来を考え、いかに平和が大事かよく伝わりました。

「大家陽子 玲子記者」

被爆当時1歳だった岩永芙美子さんに話を聞きました。岩永さんのお父さんが被爆地から戻った時の



母から伝え聞いた 父の悲惨な姿 ——岩永さんが 教えてくれたこと——

様子は、全身血まみれで肉も見えていて、あまりの痛さに身動きができません。姿をみて岩永さんはお母さん「おばけだ!!」と泣いて逃げ出してしまったことをお母さんから伝え聞いてきました。

「今井楓万 志保記者」

ような悲惨な体験や空腹、病気などから生きのびたのは、人々の優しさと生きる力だと教えてくれました。ばくは、命を大切に、普通に生活できることへの感謝の気持ちで本心に強くなりました。

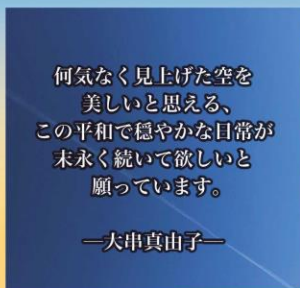


世界にしてほしいと言われまし。今私に出来ることは、今回聞いた話を身近な人に伝えることです。原爆の恐ろしさ、戦争を二度と繰り返してはいけないと伝えたいです。

「石川千尋 智子記者」



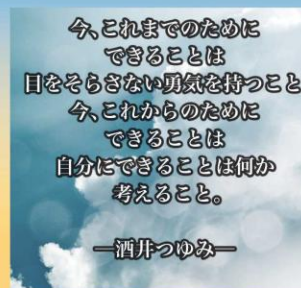
——渡部春奈——



——大串真由子——



——松浦直輝——



——酒井つゆみ——



バシール・モハバット駐日アフガニスタン大使

今ある平和を大切に ―平和にむかうアフガニスタンより―

ることに「心が痛い、悲惨なことを二度とくり返してはならない、平和がいちばん」と言っていました。

早く平和になるのを願っています。近い将来タリバンとの話し合いがあり平和がもうすぐ来るそうです。

駐日アフガニスタン大使バシール・モハバットさんは、初めて長崎の平和祈念式典に参列し、75年経った今も苦しんでいる人達がい

アフガニスタンは1979年から40年も戦争が続きました。アフガニスタンの人は国を守りたいから戦いでしたが、みんなが一日でも

医師の中村哲先生は大使の友人でありアフガニスタンのヒーローで、今も国民が彼の死を悲しんでいます。日本からの支援で発展



「平和の灯」について 実行委員会 鬼永武会長に聞く



「平和の灯」は、毎年平和祈念式典の前夜である8月8日に、平和への願いを込めたメッセージを書き入れたキャンドルに火を灯すイベントです。今年も



長崎市の小学生など、4600人以上が参加し、様々な祈りを込めたキャンドルに火が灯されました。

また、平和を願う気持ちがあれば、このイベントに参加できなくても、身近な人達と同じ様にキャンドルを作り、火を灯し、ともに祈ることはできることを教えてくれました。まずは家族でキャンドルを作り、北海道の地から核廃絶を祈ろうと思います。

〔宗万知世昌代記者〕

爆心地の地面に 被爆者の声

「声紋源場」に触れて



「声紋源場」とは、爆心地に被爆者の声の波長＝声紋を書き写し、新しい視点で原爆と向き合うことを目的としたプロジェクトです。このプロジェクトを手



専用アプリを通して見た風景。地面に描かれた声紋を読み取ると、12人の被爆者の肉声を聞くことができます。左に見えるモニュメントは、立ち上がる炎や黒煙を表現しています。

りを使って聞こえる声からは戦争を二度としてはいけないことが感じられました。竹田さんになぜ平和活動をしようにと思ったのか尋ねると、「自分が好きなことをしていたら、ここに辿りついた」と教えてくれました。みんなの好きなことが平和に繋がったら戦争が起これないと思いました。世界にこのプロジェクトが広がってほしいです。



〔原心花 幸子記者〕

今を生きる 私達の義務

核兵器と国際情勢

―広瀬訓教授（長崎大学核兵器廃絶研究センター）―



長崎大学の広瀬訓教授に話を伺いました。「核抑止」とは何かと疑問に思い

質問しました。まず、核兵器を使い相手をおどすこと。次に抑止という力は相手が冷静な思考であれば効果があがるが、実際は互いの国が相手を核兵器で攻撃する損得で動き、攻撃される怖れから核を保有する矛盾した状況であること。そして「核抑止」の考えのもと、核保有が安全保障上の暗黙のルールで成り立つた世界、との話でした。核兵器は人が造り出したものであり、この世界から人の力でなくせるもの。

大切なことは、まず核兵器とは何かよく知り、そして私達は何もできないわけではないという自覚を持つことだと教わりました。



今一度立ち止まり考え、本当に核兵器は必要なのか、高い危機意識をもつて向き合う課題だと思いました。

〔小嶋美緒 陽子記者〕



も恐ろしいことは「人の心の弱さ・そこから生まれる差別」なのだと。なので「如己愛人」の思いを大切にしていた話です。博士は持病を持ち、被爆をし、傷つきながらも周りの人を助けたことは、誰にでもできることではなく、本当に己の様に人を愛していたからできたことだと思えます。館長さんから、身の周りの小さな平和が本当の平和を生むと教えてもらったので、私も友達を大切にしたいです。

〔石川千尋 智子記者〕



41年続く平和への思い

戦争のない世界が大事――

「ながさき8・9平和展」企画委員会事務局長の松尾英夫さんに話を伺いました。核兵器の廃絶と戦争のない平和な世界の実現を望む人は誰でも参加できる市民の手作りの展覧会です。毎年2000点位の作品が集まり、全てが展示されます。今年は41回目、被爆した方から2歳の子の作品までありました。

私が印象に残った作品は戦争の時代の着物です。

第41回 ながさき8・9平和展



船や飛行機の絵が描かれていました。

松尾さんは、「戦争がない世界はやっぱり大事だ」「戦争のない世界にするために死ぬまで平和展の企画委員を続ける」と話していました。

松尾さんの話を伺って、改めて世界が平和になつてほしいと強く思いました。

〔飯塚 遥香・あゆみ記者〕



戦争は人を苦しめる 恐ろしいもの

岡野さんが マンガを通して描く平和

はいけないと教えられて生活してきました。けれど岡野さんは認知症のお母さんの介護をきっかけに、忘れたくない思い出とともに父さんがトラウマで悩んだ戦争の記憶もユーモアを交



マンガ家で被爆2世でもある岡野雄一さんに話を聞きました。
被爆者の家族は被爆したことを周りの人々に話して



岡野雄一
ペコロスの母に会いに行く

え、ぼくらにも分かりやすく描いています。「君達も伝えていってください」と岡野

さんの話した言葉に、戦争は人を苦しめ続ける恐ろしいものだというメッセージが伝わってきます。

戦争で苦しんだりすることのない平和な世界でありますように。

〔今井 楓万志保記者〕

被爆75年オンラインイベント

被爆の記憶を 受け継ぎ未来へ

これからの継承活動

サビオ駐日代表に話を聞きました。



イベントでは日本の被爆の記憶をどう世界と未来に継承するかについて、被爆者や若者が意見を語り合いました。コロナで従来の講話活動が難しくなったものの、オンライン動画配信など新しい方法が行われ



ているそうです。

サビオさんには、平和は祖先の苦しみの上に成り立っていること、そして私たちの歴史を知ることが未来につながることを聞きました。

ぼくも平和と未来のためにできることをさがしていこうと思います。

〔古川 蒼士麻子記者〕



音楽で平和の輪を ひろげよう！

――長崎から平和を発信――

池田祐希さん(長崎OMURA室内合奏団)

ぼくはオンラインで、長崎OMURA室内合奏団でファゴットを演奏している池田祐希さんに話を聞きました。



「音楽は人の心に寄り添ってくれるもの」と教えてもらいました。取材中に福山雅治さんの「クスノキ」という曲を池田さんが演奏してくれました！ 低音のファゴットの音色がと

てもきれいで、心にひびきました。

「長崎に生まれたからこそ、長崎から音楽で平和を発信していきたい」と池田さんは言っていたので、ぼくも平和のために何ができるか考えていきたいです。

〔津野 陽紀恵子記者〕



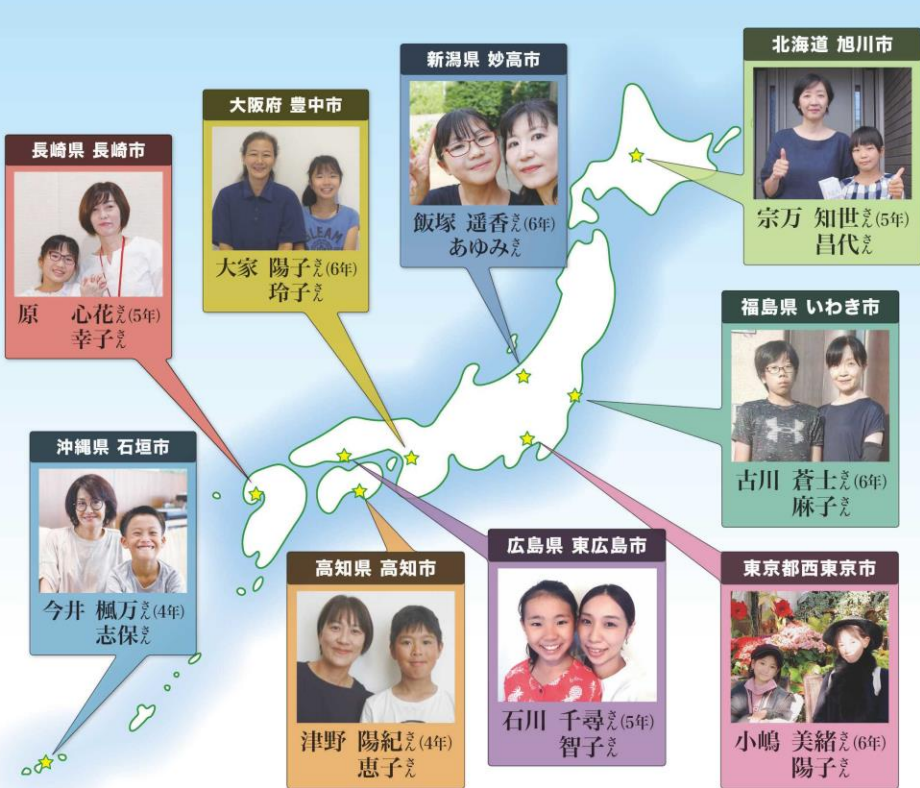
映画に込めた世界平和への思い

大林宣彦監督が 未来の子ども達へ残した言葉

本紙第6号(2013年8月発行)で取材させていただきました、映画監督の大林宣彦さんが令和2年4月10日にお亡くなりになりました。享年82歳。大林監督は映画作品『この空の花―長岡花火物語』の取材の中で、未来の子ども

達に向けて、「戦争に勝つ事が平和だと考える国が多い中、日本は敗戦から学び、戦争を無くすることが平和だと訴える勇気を持たなければいけない」と話してくださいました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。





- 1)戦争を体験した方に話を聞いて考えたこと
- 2)あなたの住む地域にある平和資料館等の施設を訪ねて学んだこと
- 3)あなたの住む地域の平和イベントに参加したり、地域で平和を伝える活動をしている人について学んだこと
- 4)家族で考えた「平和」や「命の大切さ」について



このコーナーでは、おやこ記者のみなさんがそれぞれ生まれ育った地域で戦争の痕跡を調べ、世界的な新型コロナウイルス感染症の広がりの中で、令和2年にあらためて学び考えた平和や命についてのレポートをご紹介します。【編集部】

九代 長崎県 長崎市 原 心花・幸子 記者

私は、長崎大学坂本キャンパスにある原爆医学資料展示室を訪れました。原爆の爆心地に近いこの場所、多くの医学生が講義中に椅子に座ったまま被爆して命を落としたことや、生き残った人達もガンなどの病気を引き起こしていることを知り



語り継がれる原爆の恐ろしさ



ました。また、被爆した人達を命がけで救護活動した医師がいたことに感動しました。その後、「原爆被災者慰霊碑」と「旧長崎医科大学門柱」を見に行き、巨大な門柱が傾くほどの強力な爆風だったことに驚きました。戦争は決してあってはならない、世界が平和であってほしいと思いました。

中代 広島県 東広島市 石川 千尋・智子 記者



「2020原爆展」で学んだ戦争の悲惨さ

私は「2020原爆展」に行き、原水爆禁止協議会の綿岡志郎さん・早苗さんに話を聞きました。私の住む広島県に原子爆弾は落とされました。一つの原子爆弾を落とすだけで9万から14万もの人が亡くなりました。男性は戦場へ行ったため、多くが女性や子どもの被害だったと初めて知り、印象的でした。もし原子爆弾ではなかったらもう少し被害は少なかったのに、それに戦争さえなければ誰一人苦しむことはなかったのに、戦争の悲惨さを改めて知り、戦争のない世界をつくりたいと思いました。



沖縄県 石垣市 今井 楓万・志保 記者

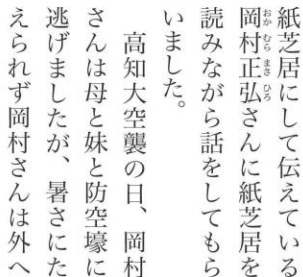


戦争絵をえがく潮平正道さんに聞いた話

特に印しように残ったことは、強制的に山に避難させられたことで八重山の多くの人が40度近くの高熱で命を落としたマラリアという病気で苦しむ様子をえがいた絵です。こんなに辛くて悲しい戦争をばくも忘れないように、いろいろな人に伝えていきたいです。



四代 高知県 高知市 津野 陽紀・恵子 記者



「戦争と平和を考える資料展」で学んだこと



飛び出して助かりました。でも防空壕の中にいた母と妹は火に巻かれて亡くなったそうです。次の日、真っ黒になった母と妹を見た時、胸が張りきけうだったと聞いて、ぼくはそんな悲しいことが本当に起こったんだと怖くなりました。戦争をしてはいけないと強く思いました。

編集後記



事務局だより

今年の親子記者事業は、新型コロナウイルス感染症拡大のリスクを踏まえ、オンラインによる取材を行いました。

初の試みで不安も多々ありましたが、大変和やかな雰囲気のおかげで、取材を終えることができ、事務局・編集スタッフ一同、安堵しております。ご協力いただいた皆様、心より感謝申し上げます。

被爆75周年という重要な節目の年に、親子記者事業に参加された一人ひとりが新しい平和発信のカタチを見つけていただけたなら幸いです。

事務局（長崎市平和推進課）
三浦 大河

北海道
旭川市

宗万 知世・昌代 記者



今だから
できること

私は、今回被爆者や平和事業についてリモート取材をし、戦争は絶対にし

てはいけないことだと思いました。今回学んだことや考えたことは、学校の友だちに伝えたいと思います。

また、平和に向けて旭川からできることをしようと思ひ、家族で作ったメッセージキャンドルに火を灯し、核兵器がなくなり、世界が平和になるよう祈りました。

福島県
いわき市

古川 蒼士・麻子 記者

取材を通して知ったこと

ぼくは今回の取材を通して、戦争の恐ろしさと核兵器の怖さ、75年経った今も苦しむ人がいることを知りました。残念ながらぼくの周りには原爆のことを知らない人がたくさんいます。ぼくはその人たちに知らせたい。そしてこの世から核兵器をなくし、戦争を二度と繰り返さないような



世の中にしていきたいです。

新潟県
妙高市

飯塚 遥香・あゆみ 記者

親子記者事業に
参加して

八木さんの「最後は人間らしく死にたい」「時計が11時2分までは動いていたのに11時3分にはならなかった」という話が印象的でした。一瞬で命を奪われた人、痛いと言いつつ亡くなっていった人。家族が死んでいくのをただ見ているしかなかった



人。みんな辛かったと思います。「やっぱり戦争はしてはいけない」と強く思いました。

高知県
高知市

津野 陽紀・恵子 記者

離れていても伝わる思い

被爆者の羽田さんやファゴット奏者の池田さんと、遠く離れての取材でした



が、二人の平和への熱い思いをとても感じる事ができました。出会えてよかったです。学んだことは伝えていきます。戦争はみんなを悲しませることです。戦争で亡くなった人たちのためにも平和な世界をつくっていかないとはいけません。

大阪府
豊中市

大家 陽子・玲子 記者

行つて見て聞いて伝えたい



7年前にお兄ちゃん（広平さん）が親子記者事業に参加したので私も直接会って話を聞いたりしたかったです。また機会を作つて長崎に行きたいです。今回取材で聞いたことを二人でも多くのまわりの人に話して、平和がいかに大切かを伝えていきたいと思っています。

長崎県
長崎市

原心花・幸子 記者

長崎から
平和を伝えたい

初めて長崎市からおやこ記者として選ばれ、緊張しながらも平和に対する思いを取材することができました。長崎に住んでいると平和学習は他の人よりもしていると思つていましたが、まだまだ知らなかったこともあつて改めて平和について勉強



強ずる機会になり、この親子記者事業に参加できて良かったです。長崎から平和発信をしていきたいです。

広島県
東広島市

石川 千尋・智子 記者

長崎の思いを伝えたい

私は、池田さんと永井さんの取材で「積極的平和」という言葉を知りました。それは戦争がないだけでなく、差別や貧困のない社会だと聞き



ました。そして、もう絶対に戦争を繰り返してはいけないと強く思ひ、広島でも伝えたいと思います。今回はZoom（ズーム）での話で

沖縄県
石垣市

今井 楓万・志保 記者

「戦争」や「平和」を意識して学びたい



ぼくは、テレビの前で長崎の平和祈念式典の様子を見ていました。今回はコロナウイルス感染拡大防止のため、長

崎に行き多くの方々と会うことができません。残念な気持ちも大きかったのですが、おやこ記者に選んでいただけたことで今までよりも「戦争」や「平和」を意識して学びたい思いが強くなりました。長崎の被爆者や戦争体験者が年々少なくなつていくなかで、ぼくが聞くことができた貴重な戦争の話を周りの友達に伝えていこうと思います。



長崎県立大学シーボルト校国際社会学部国際社会学部情報メディア学専攻卒業 前田 真由子 さん



長崎県立大学シーボルト校国際社会学部国際社会学部 渡部 春奈 さん



長崎県立大学シーボルト校国際社会学部国際社会学部 岩 崎 桜 さん



長崎県立大学シーボルト校国際社会学部国際社会学部 大串 真由子 さん

大学生ボランティアが親子記者事業を全力サポート！

今年度も長崎県立大学シーボルト校国際社会学部金村公一ゼミの学生や院卒生、新聞製作演習の学生に取材、撮影、記事作成をサポートしていただきました。

コロナ禍のおやこ記者取材で命の尊さと相手の思いやることの大切さを教えていただいた。オンラインで各地を繋ぐのは初めてだったけど、離れていても心はすぐそばに感じた。いつか皆さんと長崎でお会いしたいです！

子どもから大人まで皆それぞれが原爆や平和に対して感じているものがあり、強く平和を願っている。その思いを絵画や漫画などの作品を通して、自分のできる範囲で、自由に表現できているのは良いことだと思った。

永井さんのお話の中で、75年前と今回のコロナ禍が、差別という視点で重なりました。このような中だからこそ、永井隆博士が導いてきた隣人を受容することの意義を深く考える必要があると思います。そして私は今後も、この隣人愛の精神を大切にしていきたいと決意しました。

親子記者事業に参加して、次世代を担う若者が原爆や平和の尊さを学ぶことの大切さを改めて実感しました。今回の経験から、8月9日だけではなく、日常の中でも平和について考える機会を積極的につくろうと思いました。